

第3分科会：観光

北東アジア観光交流圏形成の現状に関する研究

梁 春 香 (東洋大学)

世界観光機関(WTO)の長期予測では、北東アジアは2020年には欧州観光圏、北米観光圏について、新たな第三の観光交流圏になる可能性が大きく、いまはその新交流圏の形成の途上にあるといっている。北東アジアの観光は、観光発展の歴史と現状、および地理的条件を異にする3つの観光交流ブロックにわけることができる。すなわち第一は、日本、中国、韓国(以下日中韓と略す)観光交流ブロック、第二はロシア、中国、モンゴル(以下露中蒙と略す)観光交流ブロック、第三は図們江地域観光交流ブロック(以下図們江地域と略す)で、この第三のブロックは、第一、第二のブロックを結ぶものとしての役割が期待される。

本論文は、これらの観光交流ブロックの特徴を明らかにしようとするものであるが、一部の地域に関してはデータが入手困難なため、さらなる分析は今後委ねざるを得なかった。

一、日中韓観光交流ブロック

日中韓観光交流ブロックは現在北東アジア観光市場の中心的存在といっている。具体的にいえば、1999年に日本人、中国人および韓国人で他の二国を訪れた者は、それぞれ404万人、61万人、192万人で、その合計657万人は、1999年に日中韓三国を訪れた全外国人1800万人のほぼ37%にあたる。同様の計算を、つぎに述べる露中蒙交流ブロックについて行ってみると、域内で相互に訪問しあった者の数は188万で、それは三国を訪れた全外国人1572万の12%程度でしかなかった。このように日中韓観光交流ブロックにおける域内での交流密度が、露中蒙交流ブロックのほぼ3倍であったとい

うことは、この地域が北東アジアの観光市場で、より重要な地位を占めていることを意味している。

二、露中蒙観光交流ブロック

ロシア、中国及びモンゴルは従来から、観光の後進国であった。冷戦時代における人的交流は、政府間の公的な訪問往来に限られ、民間レベルの観光交流はほとんどなかったといっている。冷戦終結後、中国をはじめ、相互の国境が開放され、観光交流を含め、民間レベルのさまざまな交流が三国間で行われるようになった。しかし、三国のいずれも市場経済に転換してまだ日が浅く、生活が十分に豊かだといえないのが現状である。

こうした事情を反映して、これら三国の交流は生活物資の交換・取引を中心にした「辺境貿易」から始まったといっている。

このブロック内の交流は、日中韓観光交流ブロックのように、安定的に発展してはいない。たとえば、1995～1999年に中国を訪問したモンゴル人は、26万人から35万人へと35%の増加を示しているが、ロシアを訪問したモンゴル人は17万人から逆に、13万人へと約23%減少している。その主な原因には、1990年の市場経済への移行以来、モンゴルおよびロシアが極端な経済危機に見舞われていること、ソ連崩壊後ロシアの社会が混乱するなど、両国の関係が大きく変化したことがあげられる。一方、早くから開放経済に進んだ中国にはこの種の混乱がなく、かつ、中国がモンゴルに地理的に接近している点から、モンゴル人の流れが、ロシアから中国に移動したと思われる。

露中蒙観光交流ブロックは、日中韓観光交流ブ

ロックに比べて2つの特徴がある。第一に、露中蒙三国はいずれも大陸内に存在し、陸つづきであり、この点、日中韓三国とは異なっている。もっとも中国と韓国は、地図上では北朝鮮を通して陸つづきであるが政治的には分断されており、両国、とくに韓国から中国への陸上での移動は不可能である。第二に、日中韓三国は、日韓は資本主義市場経済、中国は社会主義市場経済というように、社会体制を異にするが、露中蒙三国はいずれもが長らく社会主義経済体制であったことである。

三、図們江地域観光交流ブロック

図們江地域観光交流ブロックにはどの国が含まれるかについては、まだ多少の不統一がある。一般には、このブロックは、図們江流域に位置する中国、ロシア、北朝鮮の三国で構成されていると言えるが、国連では韓国、モンゴルも当該地域に属すると見ている。北朝鮮は地理的には確かにこのブロックに属しているが、他の国のように、観光の門戸が十分に開かれていないので、真の意味で図們江地域観光ブロックに属しているといえる

かどうかは、微妙である。最近、北東アジアの地域開発が国際的に重視されるようになってから、北朝鮮の一部地域が観光市場として日の目を見るようになってきた。

しかし、この観光交流ブロックは、日中韓交流ブロックと露中蒙交流ブロックとを統合し、北東アジア全体を一つの国際観光交流圏にする、重要な役割を果たすものと期待されるが、現状はまだ実績に乏しく、単なる期待にとどまっているというほかはない。1999年を例にみると、図們江地域への外国人数訪問者数は約26万人で、しかも、訪問者の95%は中国人および韓国人（それぞれ約74%および21%）であり、他の諸国はせいぜい2%前後に過ぎない。訪問者のもっとも多い中国人ですら、北朝鮮（羅津・先峰）訪問者は約8万人に過ぎず、日本人の訪問者は53人、韓国人にいたってはゼロである。

四、域内における観光交流の構図

2001年の域内の人的往来は表1に示されている通りである。日本、韓国、中国、ロシア、モンゴ

表1 北東アジア諸国間相互訪問者数（2001年）

単位：千人

到着国 出発国	日 本	韓 国	中 国	ロ シ ア	モンゴル	合 計
日 本 (%)	— —	2,377 (46.2)	2,385 (21.2)	63 (0.3)	12 (6.0)	4,836
韓 国 (%)	1,134 (23.8)	— —	1,677 (14.9)	61 (0.3)	10 (5.3)	2,882
中 国 (%)	391 (8.2)	482 (9.4)	— —	494 (2.3)	67 (35.1)	1,435
ロ シ ア (%)	35 (0.7)	135 (2.6)	1,196 (10.7)	— —	66 (34.6)	1,432
モンゴル (%)	NA NA	20 (0.2)	387 (3.4)	135 (0.6)	— —	534
北 朝 鮮	NA	NA	NA	16	0	16
北東アジア (%)	1,560 (32.7)	3,006 (58.4)	5,644 (50.3)	796 (3.6)	155 (80.9)	11,135 (26.1)
世界からの 到着客総数	4,772	5,147	11,225	21,169	192	42,505

出所：各国観光統計2001年版により、ロシアのデータは2000年版によるものである。

ルへの外国人来訪者数全体に占める割合はそれぞれ32.7%、50.3%、58.4%、3.6%、80.9%、となっている。このように、ロシアを除いて、他の4カ国については全体の半分以上もしくは全体の約3割は域内からの来訪者数に占められていることが分かった。これは域内諸国間の観光交流の依存度が高いことと交流の活発さを物語っている。

なお、表1は域内の5ヶ国が相互に強く依存しあうことを示しているものである。2001年の場合、蒙は中露に約70% (35.1+34.6) 依存し、中国は日韓に36% (21.2+14.9) 依存し、日本は中韓に32% (23.8+8.2) 依存し、韓国は日中に56% (46.2+9.4) 依存している。したがって、4カ国の相互依存の構図は、蒙は主に中露に、中国は主に日韓に、日本は主に中韓に、韓国は主に日中に、というような構図になっている。すなわち、域内の4ヶ国(ロシアを除く)のいずれの国も自国の観光市場に占める30%以上を相手2国に強く依存しているということをはっきりと示している。これらのことは、相互の依存関係がいかに高いかを示していると同時に、この地域の平和発展が関係諸国にとっては、どれほど重要であるかを示すものであろう。

以上、北東アジアの観光現状について、3つの観光交流ブロックにわけ、それぞれ簡単に述べたうえで、域内の交流構図も考察した。日本、中国、

韓国の三国からなる交流ブロック、すなわち日中韓観光交流ブロックは、北東アジアの観光市場の中心的存在であるが、ロシア(極東地域)、中国(東北三省)、モンゴルの三国からなる交流ブロック、すなわち、露中蒙観光交流ブロックは、地理的には陸つづきという有利な条件を持ちながら、政治的、経済的、社会的要因の変動性および後進性のゆえに、日中韓交流ブロックほどの強固さに欠けている。図們江地域観光交流ブロックは、北朝鮮をも取り込み、先の二つの観光交流ブロックを統合して、北東アジア国際観光交流圏の形成する役割が期待されるが、交流ブロックとしての活動はいまだ低調であり、今後に期待するほかはない。

【参考文献】

- ・中国国家旅遊局「中国旅遊統計年鑑」各年版 中国旅遊出版社
- ・国際観光振興会「JNTO国際観光白書 世界と日本の国際観光交流の動向」2002年版
- ・総理府編「観光白書」各年版
- ・辻久子 「北東アジアにおける人的国際交流のすすめ」ERINA REPORT vol.49 pp.8-14 2002年
- ・梁 春香「北東アジアにおける国際観光圏の形成過程」観光学研究第1号 平成14年3月
- ・梁 春香「北東アジア地域国際観光圏の構築に向けて」講演録、第7回環日本海(東海)拠点都市会議での基調報告 2001年8月23日

COMMENT

野 村 允 (北陸環日本海経済交流促進協議会)

1 本研究の意義

観光は、“見えざる貿易”と言われているように、北東アジア地域では、近年、経済の発展とともに、観光の役割の重要性について、認識が高まってきている。中国では、WTO加盟を機に、サービス産業の市場開放への対応の一環として、観光産業の基盤づくりを進めている。ロシアにおい

ても、昨年開かれた日露経済合同会議では、日露観光協力の促進が提唱された。こうした潮流の中で、北東アジア地域を3つの観光交流圏に分け、それぞれの現状を踏まえながら、将来、3つの交流圏の統合はかり、北東アジア観光交流圏の形成を目指すための課題を指摘した新鮮味溢れる研究と言えよう。

2 研究内容のポイント

①世界観光機関（WTO）の長期予測によると、2020年には現在の欧州、北米に次いで、北東アジア地域が新たな第三の観光交流圏になる可能性がある。②2001年の域内の人的往来を見ると、域内諸国間の観光流動が活発化しており、この地域の平和発展がいかに重要なかを物語っている。③北東アジア観光交流圏を3つに分け、それぞれのブロック内の観光流動を分析すると、日中韓観光ブロックが最も重要な地位を占めているが、他のブロックは、まだ活力に欠ける。④現状、北東アジア観光交流圏形成に向けての途上にあると言えよう。

3 今後の課題

各ブロック内での観光流動を高めるためには、①地方レベルでの多面的交流（2国間文化、スポーツ、経済交流etc.）を積み重ねる、②新観光地の開発（日中共同開発など）、③観光流動の受け皿づくり（インフラ整備などのハード面、接客マナーなどサービスの向上・観光関連の人材育成などソフト面のレベルアップ）などが当面の課題であろう。将来、各ブロック内での活力が高まり、ブロック間の交流が進めば大きな観光市場が形成されよう。

渤海国旅遊路の開発整備に関する研究

佐々木宏茂（東洋大学）
青木雅明（東洋大学）

1. 旅行の第2ステージのコンセプト

観光とは、日常の生活地域を離れ、他の土地の風景や史跡などを見物し、楽しみながら旅行をすること（sightseeing）である。人は非日常的な世界を求めて旅に出、先ず旅行先の鮮烈な風景や風俗習慣に触れてリフレッシュする。

さらに、その土地のモニュメント（記念碑・記念像や歴史的遺物・遺構）に触発されて過去の事件や風景、往時の人間生活の様態などに想像を巡らして、興味と感動を覚えることが多い。その場合、人は時の流れを遡ってもう一つの旅をしてみると見ることができる。それは旅先の土地から再び出発して、既に消滅した過去の世界に「旅遊」することを意味する。

この点に着目すると、旅行の行程は2つのステ

ージから構成されていることに気が付く。それらは現代の世界における旅と過去の世界における旅、あるいは現実世界における旅と想像世界の旅である。そのため、その第2ステージの旅程における楽しさと興奮が大きければ大きいほど、旅行の全行程の価値は増大しよう。

地球上の主要な観光地を見尽くした人も少しずつ増えているが、そのような旅慣れた人々の多くは、モニュメントを介した過去の人間世界への旅遊を好むように思われる。

観光ルートに魅力的なモニュメントと適切な関連サービスを組み込むことによって、旅行者は遠い過去の世界へと旅立ち、そこで回想と想像を楽しむ、充実した旅遊を体験することが出来る。それは、旅行者、地域社会、旅行産業の三者にとってそれぞれ価値を増大させる。